

ちどり 令和8年1月度特別作品

縮景園

ちどり

広島市内に住んでいるながら、私は縮景園に行ったことが数回しかありませんでした。今回、ガイドさんに園の自然や歴史について詳しく話してもらいながら、園内を一巡りしました。園内の自然には、あちこちに目を見張るものがありました。中でも、最も印象に残ったのは、原爆投下によって園の近くの猿猴川で多くの人々が命を落としたこと、そして三本の被爆樹本（松、イチヨウ、ムクノキ）が、今もなお園内で生き残っていることでした。

冠木門入りてすぐ横寒の木瓜

冬の園ガイドの話聞き巡る

どの松も同じ高さに菰巻かれ

湧き水に冬の鯉みな集まりて

寒禽の声の飛び交ふ竹林

寒禽が園の内外を行き来せり

松の葉に公孫樹落葉の散り掛り

落葉掃く人の手を止め話し出す

青々とした被爆の松に菰巻かれ

園の端被爆の棕の葉ゆる

《作品鑑賞》

井藤希

田園風景やそこでの生活をよく詠まれているちどりが今回、静謐さの中に美しい動きのある縮景園の冬景色を特別作品に詠まれた。

冠木門入りてすぐ横寒の木瓜

表門を入ってすぐ目に入ってきた木瓜の花、色彩に乏しくなる冬の庭園の中で、その赤い花はさぞ印象的だったに違いない。庭園巡りのわくわく感が素直に伝わってくる。

寒禽の声の飛び交ふ竹林

寒禽が園の内外を行き来せり

冬木立に鳥たちの意外と大きい鳴き声と盛んに飛び交う姿、庭園の静けさの中で冬場も変わらぬ生きものの息遣いが、聴覚と視覚で感じられる。

園の端被爆の棕の葉ゆる

このムクノキは被爆樹の中でも特に樹勢が衰えていると言われている。この句はその樹に寄り添う作者のやさしさと励ましの気持ちが出ていて「葉ゆる」がほのぼのと暖かい。